

コロサイ人への手紙1章15-18節 「万事における第一の方」

1A 万物において 15-17

1B 神のかたち 15

2B 創造主 16

3B 永遠の方 17

2A 教会のかしら 18

本文

コロサイ人への手紙1章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、コロサイ 1 章前半まで来ました。この前、パウロの神への感謝と祈りの部分を読みました。そして今日から本題です。今朝は、15 節から 18 節までをじっくりと見ていきたいと思います。午後礼拝では、その続き 19 節以降を見ていきます。15 節から 20 節は、当時の初代教会で讃美の歌として使っていたのではないかとまで言われているところです。共同訳の聖書では、事実、詩篇のように、韻を踏んだ言葉の並べ方としています。

もう一度、コロサイの町に流行っていた考えのことを思い出していただきたいです。いろいろな、神々と呼ばれるものに仕えていました。神秘主義、いわゆるスピリチュアル系ですね。ギリシア哲学も入り込んでいました。グノーシス主義も入っています。ユダヤ教の律法主義も入っていました。天使礼拝も入っていました。食べてはいけないというような、禁欲主義もあります。いろいろな、いわゆる「主義」が入って来ていました。それらの考えや行いが、教会の中にも入り込んでいたのです。混然一体となっていたので、しばしば「コロサイの異端」とまで呼ばれています。

パウロは、これら一つ一つを間違っていると教え諭すことができたかもしれません。けれども、それよりもパウロは、「キリストがすべてなのだよ」ということを教えます。この方がすべてにおいて第一の方で、この方がおられたら、すべてがあるのだよ、ということを実際に知れば、これらのものに拠り頼む必要はないのです。事実、この方が全てであり、私たちの身に起こることは、この方を知り、その愛を知る一過程にしかすぎないのです。パウロは、それで万物において、御子が第一の方であったことを話します。そして教会においても、この方がかしらであることを話します。

ところで、私たちは、イエスを主として口で告白して、信じました。以前、とても興味深いことをクリスチャン二世の人から聞きました。中学生ぐらいの頃までは、イエス・キリストは坂本龍馬のような存在だったということです。つまり、非常に尊敬して、敬愛してやまない指導者のようなイメージです。ミュージカルでも「ジーザス・クライスト・スーパースター Jesus Christ Superstar」というものがあります。私たちキリスト者が、ややもすると、イエスご自身が自分にとって主ではなく、尊敬のできる

教師や指導者のようになってしまうことはないでしょうか？この時にはイエス様に頼るけれども、他の時にはあまり関係のないこと、という棲み分けを行っているのです。「イエス様だけで十分」と、なっていないのです。ですから、今朝見ていくところは、ものすごく大事です。

1A 万物において 15-17

1B 神のかたち 15

¹⁵ 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。

これは、御子ご自身が神そのものであり、万物をすべて任されていることを示している箇所です。イエス様は、人としてこの世に現れました。しかし、この方は見えない神が見える形で現れてくださって、神ご自身です。ギリシア語は、「エイコン εἰκών eikon」であり、正教会が礼拝で使っている聖画は、イコン(icon)と呼ばれています。これは、「神のような存在」というものではありません。神のかたちそのもの、という強い意味合いの言葉です。イエス様は、ピリポから「主よ、私たちの父を見せてください。そうすれば満足します。」と言われた時に、お答えになりましたね。「ヨハ 14:9 ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」

日本の人たちに、「神は信じるが、なぜイエスかが分からない」と言われる方が多いですね。漠然と神はいるのだらうと思っているが、イエスは遠い、遠い存在です。しかし、イエスは、はっきりと、「わたしがその神のイコン、写し絵そのものだよ。」と言われているのです。

イエス様は、何度も何度も、そのことをユダヤ人たちに証しされました。ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようと、石を取り上げた時に、「ヨハ 10:32 わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」と問い質させると、「10:33 あなたを石打ちにするのは良いわざのためではなく、冒瀆のためだ。あなたは人間でありながら、自分を神としているからだ。」と言っています。イエスがなされることが、まさに父と一つにしているということで、ユダヤ人たちはこの方に反対したのです。「イエスは、自分のことを神と主張しなかった。」という人がいるのですが、聖書のどこを見ても、この方が神と同一というところから離れることは決してありませんでした。

そして、「すべての造られたものより先に生まれた方」とあります。先に生まれた方、というのはギリシア語で、「プロトコス πρωτόκοκος prototokos」といいますが、他の聖書の箇所では「長子」と訳されているものです。「生まれた」といっても、イエスがマリアから生まれたという意味での、生まれるという意味ではありません。むしろ、父のものをすべて相続するという意味合いがあります。あらゆる造られたものがあったとしても、それよりも先に存在します。そしてあらゆる造られたものが、この方の手中にあるという意味合いがあります。ヘブル書 1 章 2 節には、「神は御子を万物の相続

者と定め、御子によって世界を造られました。」とあります。

イエス様が、いろいろなことに対する付け足しのようにみなすのは、間違っているのです。祈りについても、いろいろなことをした後で、ああ、祈って行かないといけないとすること。自分の持っている物について、自分でいろいろ使っていく中で、ああ、主にも献げないといけないとすること。これだと、この方が、万物の先に生まれた方ということにならないのです。それだと、万物の長子であられるのに、まるで造られた偶像であるかのようにみなしていることになります。

主は、エジプトからイスラエルを贖い出される時に、「出エ 13:1 イスラエルの子らの間で最初に胎を開く長子はみな、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それは、わたしのものである。」と言われました。なぜ、長子に拘られるのか？二番目、三番目ではだめなのか？なぜなら、神は御子を、すべてのものの長子にしておられるからです。初めのものを献げることによって、初めて御子を知ることになるのです。

2B 創造主 16

したがって、すべての神の創造のお働きに、御子イエスは初めからおられて、その働きの隅々まで関わっておられ、今も、万物を支えておられるということになります。16 節を見てください。

¹⁶ なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。

パウロは、ここで、造られたすべてのものについて、目に見えるものはさることながら、「見えないもの」を強調しています。「王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ」というのは、目に見えないものです。霊的な勢力です。コリントにおいては、これこそが信じられていたこと、支配や権威がいろいろあって、それらに仕えていかないとはいけないと考えていたのです。スピリチュアルな人たちだったのです。しかし、これらのものは、すべて御子にあって造られたのだということです。イエス様が、これらの権威の一つではなく、すべての支配や権威の創造主です。

イエス様が会堂で教えておられる時に、汚れた霊につかれた人が叫びましたね。「あなたは、神の聖者です。」と。そして、イエス様は「黙れ。この人から出て行け。」と言われたら、その人から穢れた霊が出て行きました(マルコ 1:21-28)。そして、ガリラヤ湖の荒波でさえ、鎮まらせました。この方は、目に見えるものも、目に見えないものも、その力ある存在に対して力あるだけでなく、それらのものを造られた方ご自身だということです。私たちは、霊とは呼ばなくても、権威や力というもの、目に見えないものの圧力を感じることがありますね。けれども、そこにおいてさえ、主はおられるのです。そして、みこころを選び取ることができます。

ここで前置詞が大事ですね。「御子にあって」と初めにあります。英語では、by Him となっていますが、ギリシア語は“in”の意味を持つ言葉が使われています。)この方において、すべてのものが造られました。そして次が、「御子によって」とあります。こちらは英語では、through となっていますが、ギリシア語では、英語の意味合いのほうが近くて「御子を通して」という意味の言葉です。そして、「御子のために」となっています。

パウロがここで何を言わんとしているかという、神が御子にあって万物を造られただけで、後は、ほったらかしということではないことです。神は造られたけれども、その過程には関わっておらず、今は自然の法則のみがあるだけだ、という考えがあります。その神は聖書の神ではないし、それを神というのであれば、異なる神、偶像です。造られただけでなく、造られたものすべてに、今に至るまで関わっておられるのです。その自然の法則をも御子が造られているのです。

ですから、イスラエルの人たちの信仰は、すべてに主を認めるものでした。ルツの姑ナオミは、ベツレヘムに戻ってきた時に、「私をナオミと呼ばないでください。マラと呼んでください。全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。」と言いました(1:20)。ナオミは、心地よいという意味で、マラは苦いという意味です。ナオミは心地よいことだけでなく、苦さも全能者が与えられたと言っています。これは、神に恨みつらみを述べているのではありません。どんなことがあっても、そこには神がおられることを告白しているのです。私たちはどうしても心の中で、良いことは神からだけでも、悪いことを神は許されるはずがない、それは神の領域から外れていると思ってしまいます。いいえ、外れているものは何一つないのです。

そして大事なものは、「御子のために」とあることです。すべてのことは、御子の栄光のために存在します。この方のために万物が存在します。私たちは自分の幸福のために生きるのではないのです。いや、この方のために生きる時に、元々そのように造られているのです。

3B 永遠の方 17

¹⁷ 御子は万物に先立って存在し、万物は御子にあって成り立っています。

万物に先立っているとは、この方が初めからおられたことを示しています。ある時になって現れたのではないのです。ましてや、ベツレヘムでマリアから生まれた時に存在したのではないです。主は、万物に先立って存在していました。イエス様はユダヤ人たちに証しされました。「ヨハ 8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたし(の日)を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」と言われました。イエス様の時、アブラハムは約二千年前にいた人物です。けれども、わたしを見たと言われます。「8:57-58 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのに、アブラハムを見たのか。」イエスは彼らに

言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」

ここで、「わたしはいました」と言わずに、「わたしはある」と言っています。文法的には間違っています。けれども、これが真実です。主は、すべての時空を超えて存在しておられるのです。過去も、現在も、未来も、主にとっては同時に存在しています。なぜなら、時間を超えているところ、永遠の中に生きておられるからです。そして、ヨハネの福音書が、「はじめに、ことばがあった。」で始まっていますね。すべてのものが造られる前に、主は既におられました。多くの教会では、旧約聖書を学ばないと聞いています。私自身は驚きます。新約聖書の、イエス様とユダヤ人とのやり取りはまさに、旧約時代にこの方がおられたことを証しているのですから。新約だけを見て、あたかも旧約にイエスはおられなかったと思ったら、そのイエスは異なるイエスになってしまいます。

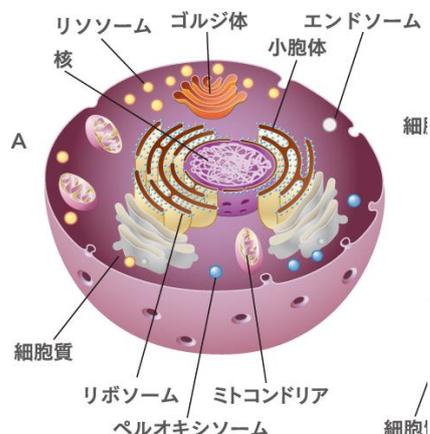
そしてすばらしいのは、「万物は御子にあって成り立っています」ということばです。私たちは万物に秩序があることを当たり前に思っています。しかし当たり前ではないのです。これは自然科学を学べば学ぶほど、気づくことでしょう。ほんの少しでも、その法則や秩序が崩れたら瞬間に世界と宇宙は崩壊します。使徒ペテロは第二の手紙で、「3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます。」と言っているとおりです。御子ご自身が、絶妙なバランスを保って、今の秩序が保たせておられるのです。

2A 教会のかしら 18

そしてパウロは、この方こそが教会のかしらなのだと宣言します。

18a また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。

すべて造られたものの長子であられる方が、教会をご自分のからだとしておられるのです。これは、驚くべきことです。ある聖書教師が、細胞の構造が、銀河系のような天体のととも似ていることを指摘していました。確かによくみると、そうなんです。神の創造の不思議を思いました。同じ神が細胞はある意味で、小宇宙であると思わされました。それと同じように、教会というのは、御子ご自身の小宇宙を見ることができると言ったらよいでしょうか。教会を見たら、この方のお姿が、そのからだとして見えてくるというのです。



しかし、教会はキリストご自身ではありません。キリストのからだではありますが、かしらが見えな

いのです。そうです、キリストに結ばれている者たちが、その方に結ばれていることによって生きて
いるのを見て、そこに集まっている者たちがそれぞれ、そのかしらにつながれているので、キリスト
が生きておられるのを知るのです。我々、生身のからだを持った者たちが集まることによって、見
えてくるのです。教会は、とても不思議な空間です。信仰を持っていない人が見れば、「何かがあ
るんだけど、何があるんだが分からない」という思いになるでしょう。肝心のかしらの部分が見え
ないのです。しかし、信仰者には見えています。キリストが見えています。御霊によって、真理のみ
ことばによって、信仰によってイエス様を見ているのです。

しかし、その方の命じられていることを、私たちが行うことによって、「ああ、何かが動いている！」
と、信じていない人はびっくりするのです。カルバリーチャペル国分寺の方々が、コロナ禍におい
て、シングルマザーなど生活に困窮している人々に、食べ物のパッケージを送る働きをしています。
すると、受け取った人たちは多くが、「何も知らない人に、なんでこんなことができるのですか？」と
いう驚きを抱かれるようです。私たちの集まりも、新しい方がいらしたら、神さまが連れて来てくだ
さったと思って、喜びますね。お祈りもします。物理的に見えているのではないのですが、天使たちも
喜んでいるのが分かるぐらい、主がこの方を喜んでおられると分かるのです。

「かしら」というのは、権威があるということもあるし、また源がそこにあると言ってもいいです。こ
の方に、私たちが拠り頼むべきものすべてがあります。この方にあつて満たされます。知恵や知識
について、キリストの中にすべてが隠されているのです。光はキリストの内にあります。力も、苦行
をしたり、規則を守ったりするのではなく、罪のために死んで、よみがえられた主につながっている
ことによって力を得るのです。この方にすべての源があります。そして権威があります。この方の
言われることに従うのです。それぞれの人たちが、キリストの命令を守り、御霊に導かれて、その
賜物を用いて仕えます。

そして、「御子は初めであり」とパウロは言っています。万物において、御子は初めでした。すべ
てのものの先におられて、万物を神が御子にあつて造られました。同じように、教会において、初
めの方です。すべてのことがこの方から始まります。すべてのことが、この方によって成り立ちま
す。そして教会におけるすべてのことは、キリストのために存在します。私たちはここに存在してい
るのですが、すべてのことが、キリストが主導しておられます。

そして、同じギリシア語、「プロトコス πρωτότοκος protokos」を使って、「死者の中から最初
に生まれた方」と言われたのです。これは、もちろん復活のことです。主が、十字架で死なれて、
葬られて、三日目によみがえられました。その復活が、何を意味しているかという、新しい創造
であります。御子は万物の長子であります。しかし、アダムが罪を犯したことによって、被造物と
神との間の調和が崩れました。今、私たちが見る世界の歪みはアダムが罪を犯したためにもたら
されています。そして、この天と地には死が入り込みました。やがて滅びるのです。着物が古くなっ

て仕えなくなるように、天地も古びて滅びるのです。

しかし、神は新たな創造を行われたのです。それが、死者の中から最初に生まれた方、キリストです。この方が、神の新しいいのちの始まりとなってくださったのです。イエス様がマルタに言われました、「ヨハネ 11:25 わたしがよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」イエスを信じる者が、イエスがよみがえられたように、自分たちも連なってよみがえるのだということです。そして、この新しい創造が、天地そのものにも及ぶのです。コリント第一 15 章を 23 節から 28 節まで、読んでみましょう。

²³ しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。²⁴ それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。²⁵ すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。²⁶ 最後の敵として滅ぼされるのは、死です。²⁷ 「神は万物をその方の足の下に従わせた」のです。しかし、万物が従わせられたと言うとき、そこには万物をキリストに従わせた方が含まれていないことは明らかです。²⁸ そして、万物が御子に従うとき、御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

このように、御子が、死そのものを世界から滅ぼす第一の方となりました。私たち教会には、このように復活の希望があります。新しい創造の始まりがあります。これまで罪の中で死んでいた者たちが生きます。新たないのちが起こるのです。産婦人科の病院では、絶えず新たないのちを目撃します。しかしそれは肉体のいのちですね。私たちは、霊のいのちを目撃するのです。そして、やがてこの肉体も新たにされること、そして終わりには天地そのものが新たにされる希望にあふれています。教会とは、なんとエキサイティングなところでしょうか！

^{18b} こうして、すべてのことにおいて第一の者となりました。

「第一の者」とは、卓越している、優越しているということです。すべてのことにおいて、はるかにすぐれた方であり、この方にあってすべてが存在しています。父なる神がご自分の独り子をそのようにされたのです。だから、あたかも第一でないかのように、他のものを取り入れる余裕など、これ一つもないのです。私たちの教会にいる目的は、ですから、いかにキリストに満たされるのか？ということなのです。他の世にある哲学。種々の教え、スピリチャリズム、特定の思想や運動、そういったものを取り入れる余地や暇などないのです。

私たちは以前、教会に西岡力先生をお招きしました。日本人が北朝鮮に拉致されていっていることを、日本で初めて論文にして明かした人です。そして、その小さな救出運動が、今や拉致問題

対策室が政府の中にあるほどになり、また歴代のアメリカの大統領も北朝鮮との交渉の中に取り入れていくなど、大きな影響力を持っています。その西岡先生は、キリスト者でもあります。教会の中で政治のことが流行ることがあります。キリストの福音に、世の中で語られている政治のことをくっつけて話すのです。数多くの政治家に出会ってきたキリスト者である西岡先生が、牧師たちに苦言を言っていました。「みことばだけ、語ってほしい。」そのような政治の現場にいるキリスト者が、キリストに向かいたいと願って教会に足を運んでいるのです。そこに、キリストをかしらとしていない姿を見せて、牧師が何をやっているのか？ということになります。

英語でこんな言い回しがあります。It's all about Jesus.全部、イエス様のことだ、というのが直訳です。イエス様だけなのです！他に何も必要ないのです。なぜなら、イエスがおられたら、すべてを得ているのですから。万物が御子によって造られたのです。この方だけで十分なのです。